



名張市立病院の医療再生

城西大学経営学部教授 伊関友伸

新医師臨床研修制度を契機とした医師数減少

先日、三重県名張市の名張市立病院を訪問し、亀井利克市長、伊藤宏雄病院長をはじめとする病院関係者のお話を伺う機会を得た。名張市は近鉄大阪線の沿線にある人口約8万人の市である。名張市立病院は、人口に見合う中核医療機関の整備を望む市民の期待に比べて、平成9年に病床数200床の病院として開設された。

病院は、200床という中小規模の新設病院であることや、病院整備に約150億円がかかったこともあり、開院当初の一般会計繰入金(3条+4条)は14・5億円を超えるなど厳しい状況にあった。その後次第に経営が安定していったが、平成16年度から始まった新医師臨床研修制度は名張市立病院にも深刻な影響を与える。平成17年度に29名在籍していた医師は、平成21年度には24名に減少する。特に診療の中核となる内科は、平成17年度の10名から平成20年度には7名に減少する。さらに、小児科は平成17年度に2名の医師が勤務

していたが、医師派遣を行う大学の医局から引揚げを通告され、同年7月から10月までの4カ月小児科の常勤医が不在となる。

小児科医の招へいと小児救急医療センターの開設

亀井市長や名張市立病院にとって、小児科医の不在は予期できない事態であった。悩んだ末、亀井市長は、関西医科大学小児科の金子一成教授を訪ねる。亀井市長は、平成14年の市長就任以来取り組んできた子育て支援(フィンランドの政策を取り入れた「名張版ネウボラ」は全国的にも有名である)や健康づくりの取り組みを説明し、小児科医の派遣を訴えた。金子教授は、これまでの亀井市長の取り組みを評価し「一緒にやりましょう」と小児科医を送ることを決断する。その後、年を追うごとに小児科医が1名ずつ増員され、平成25年度には5名体制となる。平成26年1月には、入院など二次救急医療を必要とする子どもに24時間365日の医療を提供する「小児救急医療センター」が院内に開設される。また、平成23年4月には病院内に「小児発

達支援外来」を、平成24年4月には「子ども発達支援センター」を設置し、連携して支援を行っている。全国から子ども達が相談に集まっている。

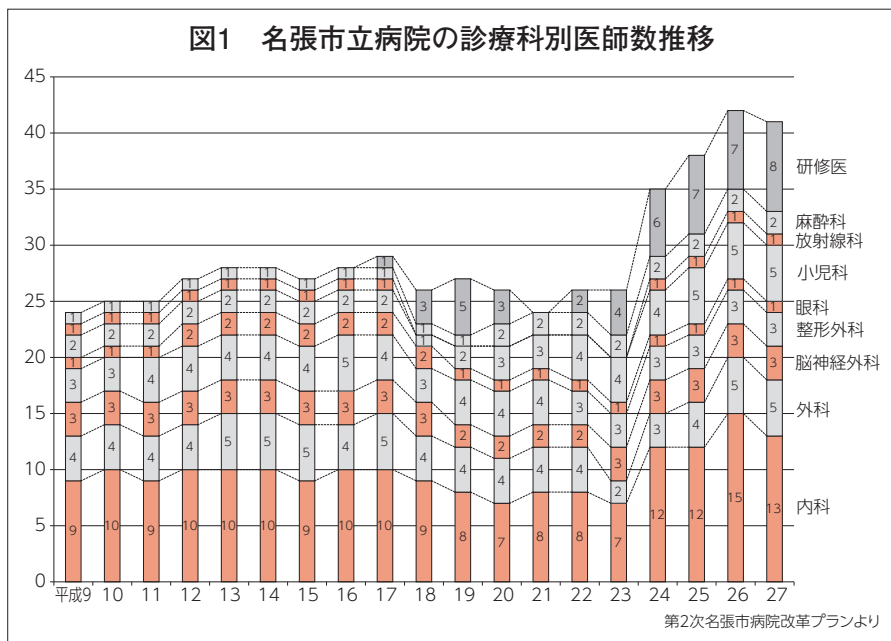
地域医療教育研修センターの設置と内科医・研修医の増加

病院の核となるのは内科である。全国でも内科医不足に悩む自治体病院は多い。内科医の減少に対して、残った内科医の負担を軽減するために、市立病院は、平成19年10月に内科の完全紹介外来制を導入。平成20年4月には伊賀地域3病院による救急輪番制を開始する。平成21年5月には内科医である伊藤宏雄医師が院長に就任する。

平成24年6月には、地域の医療機関(かかりつけ医)との役割分担と連携を図り、地域医療全体の充実を図ることを目的とした制度である「地域医療支援病院」の承認を受ける。

さらに、同年10月には、三重大学医学部の協力を得て病院敷地内に「地域医療教育研修センター」が設置される。三重大学医学部への寄附講座(伊賀地域医療学講座)の講師とし

図1 名張市立病院の診療科別医師数推移



て医師が派遣される。
センターは、地元医師会と協力して地域で働く医療従事者のための勉強会などを開催し、地域医療水準の向上に取り組みほか、三重大をはじめとする医学生を受け入れ、医師初期研修(医師免許取得1~2年目)では、三重大など他機関とテレビ会議システムを利用した勉強会や症例検討会の実施、医師後期研修(医師免許取得3年目以降)では、ニーズに合わせた研修指導により地域で活躍できる総

合医・家庭医の育成を目指している。特に初期研修医の受け入れプログラムは、三重大大学医学部附属病院と連携し、市立病院16カ月、大学病院8カ月の実習を行っている。
さらに、平成25年度から、地域住民を巻き込んだ「隠サマー」キャンプを毎年開催している。キャンプでは、医学生、研修医が集まり、有名講師の地域医療講座、グループに分かれ、地域に向いての実習が行われている。
大学と連携した医師研修は研修医にも人気で、平成27年度の初期研修医は8名に達する。常勤内科医も確実に増加し、平成27年度で13名に及んでいる。

図1のように、医師の総数も、平成27年度には41名が勤務するに至っている。

名張市議会の協力

市立病院の医療再生で特筆すべきは、議長経験者をはじめ市議会議員が病院を側面支援し、若手医師や医学生の地域への受け入れの手伝いをしたことである。全国の医療再生をした自治体病院の事例をよく勉強し、病院への理不尽な攻撃をしないこと、病院と地域をつなぐことを意識して行動したことは評価できる。

産科の開設、病院のこれから

平成28年9月定例会で、亀井市長は平成31年度を目標に産婦人科を開設し、分娩を行うことを表明する。大学の協力を受け産科婦人科医の派遣を受ける見込みが立ったことに基

づく表明であった。
亀井市長は、「医師は政治力では増えない、医師を派遣する教授との信頼関係が大事」とされる。これまでの名張市の子育て政策や市立病院の医師養成の取り組みが評価されての産科の開設であると考えられる。

医師増が実現して見えてきたものは、200床という病床数の少なさである。これ以上の医療機能の向上には、伊賀地域における医療機能の再編・ネットワーク化が必要となるが、それぞれの自治体の事情があり簡単な話ではない。名張市立病院の医療再生は、医師不足が深刻なまままで経営の厳しい中小規模の病院にとってモデルとなる事例であり、他の病院にとっても参考になると考えられる。今後の名張市立病院の飛躍を期待する。

筆者プロフィール

伊関友伸 (いせき ともとし)

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究テーマは、行政評価、自治体病院の経営、保健・医療・福祉のマネジメント。総務省公立病院に関する財政措置のあり方等検討会委員など、数多くの国・地方自治体の委員等を務める。著書に「まちに病院を!」(岩波ブックレット)「自治体病院の歴史 住民医療の歩みとこれから」(三輪書店)などがある。

タイトルの「アスクレピオスの杖」とは、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇(アスヘビ)の巻きついた杖。医療・医学の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークである。